

「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

アメリカ 慶應義塾ニューヨーク学院

目次

- ① 学校の規模や子どもたちの実態
- ② 現地の新型コロナウイルス事情
- ③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯
- ④ 実際の取り組み
- ⑤ 苦勞した（している）こと
- ⑥ 喜びを感じた（感じている）こと
- ⑦ 今後への課題

①学校の規模や子どもたちの実態

- 学院には9年生(中学3年)から12年生(高校3年)まで約320名の生徒が在籍。その内約300名が世界各地から来ている寮生、残りが近隣に住む通学生。

② 現地の新型コロナウイルス事情

- 3月4日には学院所在地であるニューヨーク州ウエストチェスター郡で10人の陽性患者が見つかり、3月7日にニューヨーク州緊急事態宣言が出された。
- ニューヨーク州のすべての学校は3月18日から一斉休校となり、州知事より3月22日からの自宅待機要請が出された。
- 5月20日現在、休校は学年度末の6月まで続くことが決まり、ウエストチェスター郡の自宅待機要請は5月28日まで延長。
- 日系航空会社の国際線ニューヨーク運航便は3月20日から運休・減便が始まり、日本政府は3月26日から日本人を含むすべてのアメリカからの入国者に対し入国制限措置を実施。

③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければ いけなくなった経緯

- ニューヨーク州で新型コロナウイルス感染者が出る前から、学院では生徒に対し感染予防と注意喚起のお知らせを行い、ニューヨーク市で初めての感染者が見つかった3月1日の後には、生徒のマンハッタンへの外出禁止をアナウンスした。
- 3月4日にはウエストチェスター郡での陽性患者が10名見つかったため、緊急タスクフォースを設置し、生徒とスタッフの安全を守るため、地域の官庁、ニューヨーク州衛生局、ニューヨーク州独立学校協会等からの情報を集積し、今後の対策の協議を開始。
- 学院内で感染症例が発生する可能性を予測し、様々な医学的根拠と校医の助言をもとに考慮した結果、3月6日、生徒の健康と安全を第一に考え、キャンパスをクローズし、出国が可能な間に寮生を保護者の元に帰す決断。それと同時に、オンライン学習への切り替えによる学業を継続することも決定。

④ 実際の取り組み

- 生徒たちの感染予防と健康状態に留意しながら、寮生が保護者の元に帰るための航空券手配と退寮準備をサポートし、双方向型オンライン授業スタート準備のため教員研修を毎日1時間行った。
- 3月18日には生徒全員が無事に保護者の元に帰り、その後2週間のディスタンスラーニングの練習期間を経て、3月30日に本格的に本学院のオンライン授業がスタート。日本時間月曜日から土曜日まで毎日時間割が組まれ、生徒は世界各地から対面で授業を受けている。

⑤ 苦労した（している）こと

- キャンパスをクローズしてオンライン授業に切り替えるという決断は早かったものの、ニューヨーク州の感染状況が急転したため、生徒の健康を守り保護者の元に帰すまでは、本当に緊張の日々だった。生徒たちに、この非常事態を理解し、前向きに行動してもらうことにも苦労した。
- また、双方向型オンライン授業に関しては、準備段階から容易ではなく、オンライン学習を熟知している教員の指導の下、一生懸命研修を重ね、スタート後もグーグルクラスルームの使い方について教員間でワークショップや情報交換を行い、新しいオンラインツールを随時取り入れ、ズームのセキュリティー対策等にも対応してきた。
- 生徒たちにとってもオンライン授業は初めてのことであったため、「ディスタンスラーニングの際の姿勢について」の規則を決め、定期的にディスタンスラーニング情報を知らせ、サポートを続けている。毎週、ズーム教員会議を行い、オンライン授業の課題について積極的に意見を交わし、新しい教育様式を軌道に乗せる努力を続けている。
- ニューヨーク学院の生徒達は全世界に散らばっているので、オンライン授業をどの国の時間に合わせるか、生徒に無理をさせないように、不公平がないか等を検討し、科目により曜日単位、週単位で時間をずらすなど、工夫しながら実施しています。

⑥ 喜びを感じた（感じている）こと

- 生徒たちの健康と安全を守ることが最優先事項だったため、ニューヨークから日本へのフライトが減便となる直前に、学院内で1人の感染者も出すことなく、生徒全員が無事に保護者の元に帰ることができ、教職員一同、心から安堵している。
- 元々海外に所在する学校であるため、保護者、生徒、学校を結ぶネットワークが構築されていたことがプラスとなり、短期間で今回のオンライン授業を開始することができた。また、このネットワークを利用して生徒の所在や状況を把握することができている。
- オンライン学習継続により、今年度の学業を終了し、6月6日にはオンライン卒業式を挙行する予定。バーチャルとはいえ、今年度の卒業生を祝福できる機会を設けることができることに、喜びを感じている。

⑦ 今後への課題

- 未曾有の事態対応に必死の3月だった。想定外の事態により、生徒たちは急にキャンパスを離れることになったことへの驚きとショックが隠せないようだった。状況を理解してもらう間もなかったように感じる。
- 今後の緊急事態時においては、生徒たちへのサポート体制が課題だと思った。